

江戸のビジュアル・コミュニケーション

消費の時代の到来と、大都市江戸の出現。「武」に代わって「文」により世を治める文治政治の基礎を築いた家康から、およそ100年。1700年ごろの元禄期を境に、世界に類を見ない一大庶民文化が花開いた。その庶民文化を支えたのが木版印刷を中心とする出版物であった。文字と絵の絶妙な組み合わせからなる江戸の出版文化。ここでは、江戸のビジュアル・コミュニケーションという側面から、江戸の印刷文化が果たした役割を考えてみた。



「女帯糸織八丈 後編」

江戸時代初期の出版物は*古活字本や仏書が中心だったが、俳諧や浄瑠璃本などの登場とともに、庶民の間にも読書の習慣が広まっていった。18世紀になると、それまで上方中心に行われていた出版も、根拠地を江戸に移すことで出版の商業化が急速に進んだ。その読書の大衆化を支えたのが、木版印刷を中心とする整版本と言われるものである。

整版本は版画を作るように、文字や絵を裏返しに形を版木に彫り、摺り上げて綴じたもの。印刷や製本プロセスには手間と時間がかかったが、文字と絵が一緒に印刷できるという利点があった。仏書や漢書、読本といったインテリ向けの本に対して、庶民の好んだ本は絵を主体とした絵草紙のたぐい。整版本は庶民の読み物にとって格好の印刷技術だった。

実際、赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻と発展してきた庶民向けの読み物は、ひらがな文字と絵が組み合わさったもので、読

むことと見るものが混然一体となった、江戸の庶民文化独特の視覚文化（ビジュアルアリティーズ）を形成していった。

江戸の庶民にとって、文字を読むことは見ることであり、絵を見ることは読むことではなかったのか。その結果、「江戸文字」と言われるシンボライズされたタイポグラフィや「文字絵」という遊び絵を生み出した。一方で、さまざまな情報を盛り込んだ錦絵（浮世絵）や謎解きのような狂画や戯画を作り出した。文字をシンボリックな形として眺め、絵からさまざまな情報を読み解いていく。

こうした庶民の視覚文化が江戸独特の軽妙洒落なこだわりの文化を築いていったのではないだろうか。ここには映像の時代と言われる現代を先取りした視覚の情報性と、一方で現代では見失われてしまったタイポグラフィへの関心やこだわりが見て取れる。江戸の印刷文化を見ることが、20世紀あるいは来る21世紀に向けての視覚文化とは何なのかを考えてみてはどうだろうか。

*古活字本：16世紀末ヨーロッパと朝鮮より伝わった活字を組み印刷方法によって印刷された本。日本では銅活字や木活字によって印刷された。

広告メディアの出現——引札とピラ

百万人都市、江戸。その江戸市民の半数近くが武家人口だったと言われているが、その生活を支えたのが工・商の人々であった。当然ながら、彼らはより多く売るためにさまざまな工夫を凝らした。その代表的なものが「引札」や「ピラ」と呼ばれるものである。

引札は報条とも言い、「くばり札」を意味した。ピラは床屋や銭湯など、人の多く集まる場所に貼られたもので、今で言えばポスターにあたる。引札は開店披露や大安売り、見世物の興行などの宣伝のために、お客一人ひとりに配った、宣伝文と浮世絵からなる摺り物である。現在で言えば、チラシ広告と言える。

引札やピラは江戸時代の半ばを過ぎたころから多く出回るようになった。宣伝文を書いたのは、平賀源内や式亭三馬、柳亭種彦、山東京伝といった当時の人気作家たち。絵も浮世絵師たちが腕を競い合った。

当時、浮世絵は出版物の一つとして絵草紙屋や版元から売られていたが、売れ筋の絵を売りたい版元と品物の宣伝をしたい店側のニーズがマッチして、引札やピラが生まれたと言われている。

浮世絵はもともと墨一色の墨摺絵から始まったが、明和2年(1765)ごろに、浮世絵界の大御所であった鈴木春信が多色摺りの錦絵を考案すると、浮世絵は今までにないインパクトを庶民の視覚に与えた。引札やピラという江戸の広告メディアは、そんな色彩豊かな視覚文化の誕生とともに登場したと言えるだろう。

引札「せんきの妙薬」



文字と絵のワンダーランド

ニュースの視覚的ドラマ化——かわら版と錦絵

江戸のビジュアル・コミュニケーションを特徴づける一つに「かわら版」がある。現在の新聞報道の走りとも言えるもので、政治的事件や災害などを伝える墨一色の粗雑な木版の摺り物であった。かわら版という呼び名は江戸時代には使われず、数多く出版された18世紀後半のころは町角で読み売ることから「読売」あるいは単に「摺物」と呼ばれていた。

かわら版の源流は時代や人物を風刺した「落書・落首」と言われている。落書・落首は厳しい出版統制の下で、人々が多く集まる場所に貼られた。かわら版も無届け出版ではあったが、当時のものには風刺や批判はそれほどなかった。むしろ、幕末近くになって時代を批判する落書・落首的な要素が強くなる。

かわら版もまた文字と絵が一体となったものだが、絵の内容に即して読み聞かせるという「語り」の世界の強いものだった。当時の庶民にとっては、かわら版はニュースを伝えるというよりも、一つの事実を物語として聞かせるものだったと言える。

安成2年(1855)の江戸大地震



麻疹絵「麦殿大明神」



鯨絵「地震よけの歌」

の直後に、鹿島大明神と地震鯨の俗説を題材にした、いわゆる「鯨絵」が大流行した。これも錦絵によって描かれたかわら版の一種である。文久2年(1862)に麻疹が流行した際には、今度は「麻疹絵」が大流行となった。麻疹絵には護符としての役割や、民間療法などの情報が盛り込まれていた。人々は鯨絵や麻疹絵の中に、色彩豊かな錦絵がもつ視覚的な力を感じ取ったのではないだろうか。

実際、幕末から明治にかけて数多く発行されるようになる「新聞錦絵」は、錦絵の多色摺りと歌舞伎的な描写によってニュースのドラマ化が頂点に達した。とりわけ「東京日日新聞」は画面を赤のインクで枠づけ、事件の血なまぐささを強烈にアピールし、人々を劇的なニュースの世界に誘った。



「東京日日新聞」933号

江戸のCII——ジャポニック・レタリング

江戸の視覚文化を語るうえで見逃せないのが、「江戸文字」と総称されているタイポグラフィである。なかでも、江戸時代の各職域をシンボライズしたタイポグラフィは、現在の社名や商品名をロゴに記号化したCK(コーポレート・アイデンティティ)やVI(ビジュアル・アイデンティティ)と呼ばれるものの先駆をなすものだ。

江戸の町人たちは、歌舞伎や相撲、あるいは火消組合や魚河岸、町方職人など、それぞれが独自のタイポグラフィを作り出し、自らの誇りやアイデンティティを記号化した。町人たちのタイポグラフィは、もともと中国の書文化に影響を受けた扁額類の書法に始まり、典雅な上代様を経て、徳川幕府の公用書流となった御家流、さらには謡曲本や浄瑠璃本、狂言本、歌舞伎の勘亭流といった流れの中から生まれてきたと言われている。

しかし、例えば、「力文字」と呼ばれる江戸火消しの纏(まとい)や半纏(はんてん)に印されたタイポグラフィを見てわかるように、粹・伊達・意地を表したその力強い独特の書体は、武家社会に代わって台頭してきた町人社会のエネルギーが表現された文字文化と言えるのではないだろうか。

「文字を見る」という視覚性を重視した庶民の文字文化は、2字・3字の漢字を組み合わせた「抱字」や3文字を合成した「寄せ字」、あるいは男の集まる所によく使われた「ひげ文字」と言われるかすり文字、祭りのときに使われた「牡丹文字」など、いずれも町人社会のエネルギーとも呼べる活力や洒落、遊び心であふれている。

参考文献：

- 『江戸の本屋』鈴木敏夫著(中公新書)
- 『江戸の板本』中野三敏著(岩波書店)
- 『江戸の蔵書家たち』岡村敬二著(講談社選書メチエ)
- 『日本レタリング史』谷峯藏著(岩崎美術社)
- 『ニュースの誕生』木下直之・吉見俊哉編(東京大学総合研究博物館)
- 『幕末・明治のメディア展』早稲田大学図書館編(早稲田大学出版部)
- 『大江戸視覚革命』T・スクリーチ著/田中優子・高山宏訳(作品社)